旧識30余年　山本佐門さんの想い出

田口　晃

山本佐門さんが亡くなった。本年三月北海学園大学を退職されたばかりである。昨年から今年と大手術を二回にわたって無事に済ませ、これからは活動に向けて体力の回復を待つ、その矢先の事故による死だった。残念・無念としか言いようがない。山本さんは北大の大学院時代からドイツ政治史の研究に従事され、中でもドイツ社会民主党の研究を生涯のテーマとしてこられた。当時左右双方から非難の集中していたK・カウツキーの研究を進められたのは、敢えて火中の栗を拾う風情であった。つまり独自の信念を若いときから持ってこられたということであろう。その後もドイツ社民党の研究は深められ、留学されたマンハイムでの調査も含め党の日常活動について研究成果を公刊している。『ドイツ社会民主党日常活動史』（一九九五）がそれである。当時の日本では未だ誰も触れていなかった先端的な分野であるとともに、地道な、普通の人間・普通の生活と結びついた政治社会の研究であった。政党としての社会民主党を超える広がり、社会勢力としての社会民主主義、という捉え方を示したのである。

一九七〇年から一〇年間北海道教育大学釧路分校に勤務され、「政治学」を教えたのを機に、現代政治の研究にも取り組むようになり、八〇年に北海学園大学に移られてからも「現代政治学」を講じ、その傍ら現実政治についても積極的に発言してきた。例えば、時流に流されず、未来を視野に入れた深い視点からの選挙分析。これは本誌の読者にもなじみの深いものであろう。さらに特筆さるべきは山本さんが中心になって運営された「札幌都市研究センター」である。「札幌圏の住民の暮らしと自治」をテーマに自治体職員、議員、市民運動のメンバーを交えた極めて実践的な研究を三〇年にわたって営々と展開されたのである。時間と気持ちの余裕がなくて、この事業に私は殆ど協力できなかったが、山本さんのきちんとした運営ぶりと、誠実な対人関係には敬意を抱いてきた。

山本さんはもともと和歌山県の出身であるが、北海道に憧れて北大を受験し、北海道出身の美穂子夫人と結婚されたせいもあってか、大の北海道好きで本籍も移されたかに聞いている。その北海道を考える山本さんの北海道政治論の一つの柱は連邦制論であった。北海道の分権・自治を連邦制の枠組みで考えており、その場合沖縄も分権自治の研究対象にされていたようである。勿論、ドイツの連邦制については周到に研究され、私の研究対象であるスイスの連邦制と二人で比べて検討したこともある。また、自然保護・自然生態論への関心もずいぶん早くから持っておられた。ここにもドイツ研究が反映していたのだろうか。山本さんと私は同じヨーロッパ政治の研究者同士で、その上価値観も近かったので、色々なおりにお話しできるのが楽しみであった。毎年夏になると大通りのビヤガーデンに山本ゼミの卒業生が集まり、近況報告やらよもやまの話をする習わしで、いつの頃からか私も仲間に加えて貰っておしゃべりを楽しんだ。映画の話、文学の話、時事の話題、と今では懐かしい想い出である。

ここ一〇年程私は宗教と政治をテーマに覚束ない研究を進めている。文字通り「八幡の薮知らず」なのであるが、その関係で日本に関しては神仏習合という現象に注目している。そうして、その代表例である熊野信仰について紀州出身の山本さんと色々話そうと、昨年の山本さん入院の際、お見舞いに五来重『熊野詣』差し上げた。すると、別の同僚から贈られたという『熊野古道』の写真集を嬉しそうに見せてくれた。術後元気になられたら感想やら何やら伺えそうだと楽しみにしていたのが、それも叶わぬ望みとなった。

「又わすれめや、旧識三〇余年」

〈たぐち　あきら・北海学園大学法学部教授〉